

式 辞

三寒四温、寒い冬の季節が去り、早春の訪れを感じる今日のよき日、ここに三重総合高等学校久住校第66回卒業式を首藤勝次竹田市長、首藤照美大分県教育委員をはじめ、多数のご来賓並びに学校関係者、保護者の皆様方のご臨席を賜り、挙行できますことを心から感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました卒業生の皆さん、卒業おめでとう。今、皆さんの胸中は、喜びと希望と惜別の思いが交錯して、感無量のことでしょう。この日が来るまでの3年間、勉強のこと、家庭のこと、友人関係のことなど、いろいろ悩んだことも多かったろうと思います。これらの悩みを克服し、見事、本日ここに卒業の日を迎えることができたことに、心から祝福の拍手を送ります。また、この日を迎えることができたのは、家族、友人、その他多くの人々の暖かい励ましと、支援があったことを忘れてはなりません。

さて卒業生の皆さん。皆さんは閉塞的な状況が社会を覆いつくしている、厳しい時代にまさに船出しようとしています。私は、その中でも、変わらぬ価値について話をし、餞の言葉とします。

第1に、人生は短い、したがって目的を1つに絞り、継続してことに当たれということです。私は「志」を立てるという事を皆さんに折につけ話してきましたが、自分の何か得意とするところを発見し、大いに伸ばしてほしいと思います。そして、それに粘り強く、チャレンジし続けてください。くじけそうになった時は、「継続は力なり」の言葉を思い出して、前に進んでください。

第2は、人間は1人では、生きられない。人と人との関係において人間となるということです。作家、司馬遼太郎さんがその遺稿、「21世紀に生きる君たちへ」の中で、「私は、人という文字を見るとき、しばしば、感動する。斜めの画が互いに支えあって構成されているのである。そのことでもわかるように、人間は社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである」と述べています。人と人とは、不思議な縁で出会い、言葉を交わし、共鳴し合い、愛情や友情という最も美しい関係を育みます。その関係を保つためには、相手の立場を思いやる心に習熟してほしいと思います。豊かな人生を送るためには、様々な体験や思索を通して、人格を磨き、人間に対する深い洞察力を養う必要があります。

第3は、これからの時代は、科学技術の発展により、便利で豊かな生活が待っている反面、人類が初めて経験するような、地球規模の自然災害や疫病など未知との遭遇が待っているような気がします。

6,400名を超す人たちが亡くなった、阪神・淡路大震災が発生してから20年が経過します。神戸市では震災を知らない市民が4割を超していることが報道されました。また、今月で5年が経過する、東日本大震災では16,000名余りの方が亡くなり、現在もお、行方不明の方が2,600人余りいます。また、現在も避難生活を強いられている方々が多くいます。このように、自然の驚異は、私たちに容赦なく迫ってきます。

そのような時、古い時代の、人々の美しい心を思い出して欲しいと思います、平成16年（西暦2004年）末に、インド洋スマトラ島沖地震による津波災害が発生した直後に開催された国際会議の席上、シンガポールの首相が日本の昔の教科書に出ていた、「稲むらの火」の話をされたとのことです。これは、安政元年（西暦1854年）に、紀州の広村で起きた実話から作られた物語です、高台に住む庄屋の五兵衛が、大地震の後の津波の襲来をいち早く察知し、自宅に積まれた刈り取ったばかりの稲束に火をつけたうえ、自分の田のすべての稲むらに火をつけて人々の関心を引き付け、村人を津波の難から救ったと言う話です。日本人が忘れていた話をシンガポールの首相が覚えていたのです。

「不易流行」。時代の最先端を切り開く勇気と、古い時代の日本人の美しい心を伝える精神の調和が求められています。今、話しました3つのことを時折思い出し、限りある人生を、より豊かに、悔いの無いように生きて下さい。

終わりに当たり、保護者の皆様方へ、3年間、本校の教育方針、教育活動に深いご理解とご協力をいただき、ご支援を賜りましたことを厚く御礼申し上げます、また、ご来賓の皆様にはご多忙の中、ご臨席を賜り、卒業生を激励頂きましたことを感謝申し上げます、今後とも本校のさらなる発展のためにご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、卒業生のみなさん、特に健康には留意され、それぞれの道を目指に向かって前進してください。

皆さんの、輝かしい前途に幸多かれと祈って式辞とします。

平成28年3月2日

大分県立三重総合高等学校久住校
校長 甲斐良治